定住外国人子ども奨学金 News Letter

※定住外国人子ども奨学金ニュースレターWeb 版は個人情報などの都合上、内容を一部変更しています。

再度のお願いです！

定住外国人子ども奨学金募金に

ご協力をお願いします！

目標額：総額 200万円

現在　142 万円

のご協力をいただいております。

2021年3月31日までにどうぞ宜しくお願いします。

今年は、売り上げを奨学金原資とするためのイベント出展は、イベント自体が、中止・延期となりました。11 月に予定していたチャリティーコンサートも、当初開催の方向で進めましたが、2度目の感染拡大を目の当たりにし、開催を断念いたしました。

一方で、職を失った人や収入が激減した人が増え続けているニュースが流れています。そして、立場の弱い人にそういったしわ寄せが行きやすいことも指摘されています。

来年度もさらに厳しい社会状況が予想されますが、このような状況ではいっそう奨学金を支給し続ける必要があります。

現状では、皆様にご寄付をお願いするしか、すべがない状況です。皆様のご協力をお願いいたします。

奨学生からのメッセージ

D さん（13 期生）

「野外活動」

私は 11 月 13 日に神戸動物王国へ野外活動に行きました。コロナウイルスが流行していることもあり、去年は県外でしたが今年は県内になってしまいました。動物王国は小さい頃に母に何度も連れて行ってもらっていたので正直ワクワクした気持ちはありませんでした。それに、新型コロナウイルスの影響により通常通りの学校生活ではなく分散登校になったりしたため、完全にクラスのみんなと一緒に授業を受けられるようになったのは 6 月の初めでした。そのこともあり、今のクラスの子といる時間がふつうより短いため、仲の良い子とまだ話したことのない子との差があり、あまり深く接する機会も少なかったです。だから私は話したことのない子と班になったらどうしようということばかり考えていました。ですが、野外活動の日は、分からない事があったら教えてくれたり色々サポートしてくれたり、たくさんの人に手助けをしてもらい、普段あまり話さなかった子と関わることができたし、その人の新しい一面をたくさん知ることができました。コロナウイルスにより文化祭など大きな行事も無くなってしまいましたが、今回初めてクラスの仲間たちと一緒に楽しめる行事をすることができて嬉しかったです。

今回の野外活動を通して、沢山の人たちとコミュニケーションをとることができ、いつも人見知りだけど自分から積極的に話すことを心がけて行動できました。この野外活動を通して学んだことは、今の時期や環境でどのように最大限に行事を楽しめるかを理解しながら学校以外の場で活動をすることで、今までは気づくことができなかった仲間意識が高まり、心の距離を縮めることができる、ということです。最初は高校生にもなって動物園はいやだなと思っていましたが、たくさん笑っていろいろな人たちとたくさん関わりを持てて良かったです。思っていたよりも楽しく思い出に残る野外活動にできて嬉しかったです。

M さん（13 期生）

「修学旅行」

僕は中学三年生の時に修学旅行で、沖縄に行きました。

僕にとって初めての沖縄旅行。青い海と空、陽気な音楽、陽気な人々、どこか僕の父の国ブラジルに似ているのではないかと、とてもワクワクしていました。

到着 1 日目、現地の人の戦争体験を学習しました。

まず、ひめゆり平和祈念資料館に向かいました。そこで、現地の人の戦争の話を聞きました。その後、沖縄平和祈念資料館で本当に起こったこととは思いたくないほどの残酷な写真を見ました。

そこから、アンティラガマに向かいました。

アンティラガマは戦時中に、住民と撤退した日本軍に使われていた避難壕でした。

ガマの中はとても暗く、涼しかったのですが、とてもじめじめしていて、とても変な感じがしていて、とても不気味でした。軍手を持っていたのですが、壁を少し触っただけなのにとても汚れてしまいました。

奥へ進むと、いったんみんな一斉に懐中電灯を消しました。その瞬間、あたりが暗闇に包まれました。相手の顔どころか、1 センチ前に何があるのかも見えないほど真っ暗でした。とても怖かったです。当時の人は、灯りを持っている人が少なく、むしろ灯りがあると見つかってしまうのでこんな暗闇の中で息を潜めて生活して

いたんだな、と思うとゾッとしました。アンティラガマの内側が真っ黒なのは自然にできたものだと思っていましたが、実はアメリカ軍の火炎放射器のせいで真っ黒に焦げたものだと聞いて、もっとゾッとしました。ガマの中は、人々の排泄物の臭いが充満してしまうので、そこにいた人たちはとても居心地が悪かったでしょう。砲撃は朝から夕方まであるので、ガマの中にいるのもつらかったでしょが、外へ出るのはとても危険だったので当時ガマに済んでいた人たちの大変さを痛感しました。

そんな情景が鮮明に僕の頭の中を駆け巡り、とても気分が悪くなってしまって、思わずガマの外に飛び出してしまいました。

旅行の中で次に心に残ったのは、今はもう無くなってしまった首里城でした。首里城は朱色と沖縄の済んだ青い空のコントラストがとても綺麗で、思わず息を呑むほどの美しさで、足を止めてしまいました。敷地内はとても広く、全部は回れなかったのでもう一度行きたいと思っていましたが、今ではもう焼失してしまって本当に残念です。

沖縄修学旅行は、行きの飛行機では、楽しいことばかりだと思っていましたが、帰りの飛行機の中では、楽しい思い出と共に戦争の悲惨さが心に残りました。

Ｓさん（12 期生）

「あっという間に一年経ちました」

あっという間に一年が過ぎました。なぜかと言うと、今年に入って二月にコロナウイルスが流行り始めました。日本と全世界中でだんだん、コロナウイルスが広がりました。すごく大変だと思います。

このコロナウイルスの流行が始まって、小学校、中学校、高校なども休校して、ほとんどの学校が休みになりました。私は、このコロナウイルスが流行り始めて、バイトに行くのがこわくなっています。バイトに行くのがこわくて、何日間も休んでいました。でも、いつ終わるか分からないので、がんばってバイトに行くことにしました。バイトに行くときは、毎日毎日マスクを二重につけないといけません。他の人が咳をしたら、私は、すぐに、逃げています。

五月になって、毎年のゴールデンウィークなら、夜は、夜店をやったり、いろんな祭もしていて、すごくにぎやかでした。残念ながら、今年は、コロナウイルスのため、ゴールデンウィークの夜店や祭も全部中止になりました。あんまり楽しくないゴールデンウィークでした。ゴールデンウィークが終わっても、学校は休校のままで、一学期の授業数も減りました。期末テストの最終日もテストがなくて、一学期が終わってしまいました。

でも、ようやく、六月、七月になって、だんだん気温も高くなって、感染する人も、だんだん少なくなってきました。ちょっとマシになってきました。でも、毎年の夏休みは、一か月半以上休んでいます。今年は、残念ですけど、二十日しかなくて、すごくショックでした。その代わりに二学期がすごく長いです。最近思うことは、いつになったら長い二学期が終わるかなということです。でも、今年は一番早くすぎるなと感じています。

これからは、だんだん寒くなっていきます。みなさんも風邪を引かないでください。特に、気温が下がっていて、感染者も多くなっているので、必ず、手洗、うがいなど予防をしてください。

今年は、大変な一年でした。来年は、コロナウイルスのワクチンを世界中の人が打てたらいいですね。早くコロナウイルスが終わってほしいと思っています。

Nさん（12期生）

「部活動での活動について」

今年、新型コロナウイルス感染症のため、行われるはずだった文化祭が中止となりました。私にとってはニ回目で、しかも楽しみだった模擬店と、日頃の活動で制作した美術部での発表も無くなり、学校での思い出がまた一つ無くなってしまいました。私の高校での文化祭は、毎年6月頃に開催されるのですが、今年はその前に自粛期間があったりして、コロナで慌ただしい時期だったので開催は難しいと思われ、結局中止となりました。

春から部活動での活動の場が無くなった上、楽しみだった行事が無くなり、とても悲しかったですが、その後、部活動で活躍できる場ができ、希望が持てました。

一つ目は、明石文化博文館で行われた、「あかし若手アートチャレンジ」という展示会です。明石市の高校に通う高校生や神戸芸術工科大学の学部の学生が制作した作品を展示する行事で、私も出品をする事となり、それに向けて作品制作を夏休みから行いました。良い作品に仕上げられたと思います。また、作品展示の際に、それぞれ出品した高校生達が自分達の作品を展示する作業の時、他校の生徒と会話する機会があり、ちょっとした交流が出来たと思いました。また、新しく入って来て、あまり接する機会が無かった後輩や同級生ともたくさん会話をする事が出来たのでとても楽しく、そして嬉しかったです。とても素晴らしい展示会でした。

もう一つは、総合文化祭です。全国の高校生が出品をし、どの作品が素晴らしいかを選ぶ、コンクールのような展示会です。私は去年、この総合文化際に参加はしていなかったのですが、今年はやっと参加出来るとの事で、出品をしました。あかし若手アートチャレンジのように、夏休みあたりから話はされていて、作品の案を出していました。自身の高校からは4つの作品だけでしたが、どれも素晴らしい作品でした。展示会当日は、私は受付をしてみたのですが、良い経験になったと感じています。

本来なら、このニつの展示会はコロナの影響で中止になるかもしれないと見込まれていましたが、無事、開催でき、また無事に作品を出品でき、終わる事が出来たので本当に良かったです。卒業までの、今後の部活動を精一杯頑張ろうと思いました。

Rさん（12期生）

「老人と海」

最近新しい本を読みました。それは「老人と海」です。その作者はアーネスト・ヘミングウェイです。彼が1952年に発表した作品です。原文はもちろん英語で、私が読んだのは福田恒存さんが日本語訳したものです。

この本の主人公は、八十四日間もの間、魚を釣れずにいた漁師の老人サンチャゴ。街で彼を慕う者はただ一人、少年マノーリンがいるだけです。サンチャゴは、マノーリンが子どもの頃から漁のイロハを教え込んでおり、弟子のような、友のような存在なのです。ここ八十四日間、ずっと不漁続きの毎日が続いています。普通の人なら「もうだめだ。」と絶望してしまうところですが、そこは強い自己を持った老人です。なおも海と対決します。ある日、老人は、いつものように漁に出かけて行きました。暗黒の中に、老人の船がただ一艘ゆれています。それはまるで老人の固い決意を示すかのように。大海に浮かんだたった一艘の船の中で、その孤独感を、身に染みて感じながら、老人は「どうか魚がとれますように」と、願わずにはいられませんでした。翌日、ついに敵にぶつかりました。しかし、その魚は、水中にもぐったままで、水面に姿を現わしません。

彼は自分の意欲を使って、あきらめず一人で釣りを続けました。そして、巨大マグロと3日間の死闘の末ついに捕獲する事に成功しました。ところが、マグロは巨大すぎて船にぶら下げたままでいると、その血の臭い

でサメがマグロを食べにきました。サンチャゴの奮闘むなしく巨大マグロは骨だけになってしまいました。

最後のパートは老漁夫と少年との美しい交わりが、情景豊かに描かれていますが、海での過酷な闘いと対照的であり、これは、あたかも平穏な日常の「豊かさの価値」を表現しているかのようでした。

この本を読んだら、たくさんの感想が出て来ました。私たちは心を込めて挑戦し、成功はそう遠くないだろうと固く信じなければなりません。この本も希望と楽観主義を維持することの重要性を教えてくれます。風が強く雨が降っていても、太陽はいつものように昇ります。人生の道にどんなにことがあっても、どんなに苦労しても、決してあきらめてはいけません。自分が毎日希望を持って、これから起こることに直面する勇気を持つことが大切なのです。

A さん（11 期生）

「学校行事の思い出について」

私は高校で行ったアメリカ研修旅行がとても心に残りました。その中でも印象に残ったことは、大きく4つあります。

1 つ目はロサンゼルスに着き、サンタモニカビーチに行きました。そこでは、日本で見たことのない景色が広がっていました。例えば、平気で知らない人とお喋りをしたり、上半身何も着ていない人が街中を歩いていてアメリカらしい自由さを感じました。私はこの自由を自分の肌で感じて、とても心地良かったです。これをきっかけに、またアメリカに行きたいと思い、アメリカの知らない部分を自分の目で確かめたいと思いました。

2 つ目は現地のユニバーサル・スタジオ・テーマパークに行ったことです。一番最初に感じたことは「さすがハリウッド!」です。アトラクションの作りが本格的で本当の映画の世界にいるみたいでした。日本とはまた別の楽しさを感じました。

3 つ目はララランドの舞台にもなったグリフィス天文台に行き、夜景を見ることができたことです。期待した通り、街の光の一つ一つが輝いて見えました。映画に映る夜景よりも綺麗に見えてグリフィスは編集なしでも映えることを知ってもっとワクワクしました。周りの建物は白でつくられていて、雰囲気が壊れないように工夫がされていると感じ、ロサンゼルスの好感度が上がりました。

最後にカリフォルニアディズニーパークに行った時のことです。私はアメリカに行く前に膝を怪我してしまいました。ディズニーのアトラクションに乗っている最中に怪我した膝を打ってしまい、その時、私も周りにいた友達も絆創膏を持っていませんでした。私は勇気を出して、隣にいた女性に助けを求めました。カタコトの英語で話して救護室までついて来てくれました。本当に心が温まりました。ですが、私は失礼なことをしてしまい、とても反省しています。助けてくれた後、チップを払おうとしましたが、今考えると、その人のやさしさをお金で返そうとした自分にがっかりしました。これをきっかけに今度、海外へ行く時は、しっかり現地の文化を勉強して理解しようと考えています。

アメリカに行って、学んだことや思い出に残ったこと、そして悔しかったことはたくさんあります。アメリカ研修旅行で経験したことをそのまま思い出に残すだけではなく、これを機に英語力を向上させるとともにアメリカをもっと知ろうと思いました。

U さん（11 期生）

「私にとっての高校生活」

私の高校3年間は波瀾万丈でした。学校が移転したり、学校で一番偉い人に怒鳴られたり、問題を起こして毎日夜 9 時まで残ったりと他の人が経験したことないような刺激的な高校生活を送りました。ただ最後のテストが終わり、恐らくこのまま卒業できると思ったときに、嫌な思い出以上に楽しく充実した思い出がたくさん思い浮かびました。

一番良かったことは多くの素敵な友達に恵まれたことです。幼い頃から同じ学校だった子が一緒だったこともあり、友人関係を築くことには不安は少なかったのですが、それに加え新しい友人もでき、毎日幸せでした。時には喧嘩をすることもありました。ただその度に仲は深まっていきました。特に印象深いのは私が問題を起こし、一緒にいた3人の友人を巻き込んでしまった時のことです。私だけが指導を受けたらいいのに、その友人は一緒に 9 時まで残って勉強してくれました。そのおかげで放課後が非常に充実したものになりました。友達や先生たちとバレーボールをしたり、黒板に目いっぱい絵を描いたり、誕生日を祝ってもらったりしました。その他にも沢山の楽しい思い出を作ることができました。一緒に笑って泣いて、怒って、みんなそれぞれ喜怒哀楽を共にして仲も深まりました。しかし、この経験から学んだことは楽しいことだけを優先するのではなく、親しい友人であっても注意をすること、そしてそういったことを遠慮なく言える友人関係を築いていくことが大事だということです。

嫌なことだらけと感じていた高校生活も、今こうして文章にしながら思い返すと楽しい思い出だと思いました。

T さん（11 期生）

「外国人あるある」

私は日本で生まれたので、「日本」に対してのイメージはあまりありません。私と同じ外国人の友達の中には、母国で生まれ育って日本に来た友達がいるので、聞いてみました。「優しい人が多い」といったイメージを持っているのではないかと思っていましたが、実際には「冷たい人が多そう。」といった返事が返ってきました。他の友達にも聞いてみましたが、みんな口をそろえて同じことを言いました。「日本」に対してのイメージはこのようなものなのかと衝撃を受けていましたが、「でも、日本に来て親切な人が多いと思ったよ。」と言ってくれました。なぜか私までうれしい気持ちになりました。

また、学校では同じベトナム国籍の親友との会話でクラスメイトや先生に聞かれたくない内容をベトナム語で話すこともあるあるです。2 人だけの秘密にもなり、優越感にもひたることができると違う学校の友達は言いました。クラスでベトナム語を話していれば、他の子に「何話してんの。教えてよ。」と今まで話したこともない子にも話しかけてもらえます。そこから仲良くなり、今ではどんなに小さいことでも相談に乗ってもらっています。自分から話しかけることも大切だと思いますが、自分自身に興味を持ってもらうことも大切だと思います。

多くの外国人が言葉で苦労する、打ち解けるまでに時間がかかるという話を多く聞きます。確かに言葉の壁はとても大きなものだと思いますが、それも自分のアイデンティティだと認めてあげることも必要になると思います。国際化が進む現在、考え方、言語などを否定せず認めていくことで共存していくことが可能になってくると思います。